ベートーヴェンの人間讃歌
――生と死のはざまを越えて

仲道郁代
（ピアニスト）

私たちがベートーヴェンの音楽に心を動かされるのは、そこに「人間とはいかにあるべきか」という哲学的な概念があるからだという。ピアノ・ソナタから作曲家の思いと感動の源を読み解く。

2019年5月26日にサントリーホールにて行われた「Road to 2027 仲道郁代ピアノ・リサイタル『悲哀の力』」より。©N.Ikegami

ベートーヴェンとの本格的な出会いは、小学五年生のとき、ドイツのピアニスト、ヴィルヘルム・ケンプの「オール・ベートーヴェン・プログラム」を聴いたことがきっかけです。どれもが初めて聴く曲だったのですが、コンサートの最初から最後まで音が心の中に飛び込んできて、引きつけられました。その前からいろいろなリサイタルに連れていってもらっていたのですが、演奏中、ずっと音楽の中に没頭して聴くことができたのは初めての体験でした。舞台上のケンプが神々しく見え、「私はあのおじいさんみたいになりたい」と思ったのです。

そんな体験を経て、今ではライフワークとして弾き続けているベートーヴェンですが、実は学生のころからずっとベートーヴェンは苦手でした。なぜなら演奏する際に感情や感覚では処理できないからです。

音楽はたいてい「きれいな曲だな」「こんなふうに弾けたら素敵だな」といった感覚から入ることが多いですよね。でも、いざ弾こうとするとベートーヴェンはそのような言葉では括れないんです。感動するだけではない何かがあって、いざ自分で表現するときに、どう付き合っていいかわからない部分があったのです。

それで「ベートーヴェンらしさとは何か」ということを学生時代はずっと探していました。ただ、これは簡単にわかることではなく、ベートーヴェンの作品に対してちっぽけな自分を感じるばかりでした。

三〇歳になったころに、周りから「ベートーヴェンのソナタを全部弾いてみたら？」と言われるようになりました。初めは「とてもじゃないけどできません」と断っていたのですが、しかしあまりにも勧められることが多いので、試しに弾いてみたものの、やっぱりしっくりきません。ショパンやシューマンを弾くのとはまったく違う。得体の知れない難しさを感じていました。

けれど一方で、ベートーヴェンを避けて演奏家を続けていくことはできないことも感じていました。ケンプのようになりたいなら、もう始めなければ。そうして、ベートーヴェンのピアノ・ソナタの全曲演奏会という大きな挑戦に踏み出したのです。一九九七年から二〇〇一年にかけて行った一連の演奏会を走り終えたとき、私にとって運命的な出会いがありました。その演奏会の最後の回で、作曲家でありベートーヴェン研究家であった故・諸井誠先生から「今まで自分が研究してきたことを全部あなたに伝えるから、あなたがのちの人たちにそれを伝えてください」という言葉をいただいたのです。

そして、また全曲を演奏するシリーズを始めることになり、楽譜と首っ引きで諸井先生のプライベートの講義を受け、作曲家の視点からなぜこう書いたのか、それをどう読むのかということを徹底的に教わりました。「ベートーヴェンは面白い」と心の底から思うようになったのは、そのときからです。

生前、諸井先生は「研究家は分析してこれはいったい何なのだと考えていくけれども、演奏家はそれを音にして立ち昇らせてほしい」と言っていました。ベートーヴェンの音楽で心、感情に訴えかけられるところの理屈となっている楽譜をきちんと読んで解釈して、それを実際の音にして伝えることが、私がすべきこと。諸井先生に助けていただいたことを生かしながら、三二曲のソナタをずっと弾き続けています。今回は先生から教わった読み解き方に私の解釈も加えてお話しできたらと思います。

ベートーヴェンに対する印象

ところで日本人にとってベートーヴェンは堅そう、難しそうというイメージがあるかもしれません。しかしドイツの人たちにとっては、同じドイツ人的な論理の思考回路をもつベートーヴェンはよくわかるところがあるのではないかと、ドイツのミュンヘン国立音楽大学に留学したときに感じました。人々にはその土地に根づいた教会音楽や民謡などの素養があり、そこをルーツとして生まれた音楽に親しんでいます。

日本で生まれ育った私たちが邦楽を特に学んでいなくても、お祭りで流れる笛の音や神社仏閣で奏でられる音楽を聴いて違和感がないのと同様に、ドイツ人の中にはベートーヴェンの音楽が自然となじむところがあるのではないでしょうか。

また、その土地の自然風土も音楽の中には含まれているものなので、「ベートーヴェンが息をしていたのはこの空気感だよね」という共通意識が彼らの中にあるというのも重要な点だと思います。

日本人にとってベートーヴェンが近寄りがたいのは、音楽室のあのいかつい肖像画のせいもあるかもしれません。でもだからといって、もしベートーヴェンがニッコリしている肖像画が掲げられていたとして、その人が書いたという交響曲第五番《運命》を聴かされたら、そのギャップにきっと「えぇー？」とひどく驚くでしょう（笑）。